

河川敷では、少年から青年になる一歩手前の青い声が響いている。

剥げかけているものの未だ鮮やかな地面の緑の芝を、スパイクで踏みしめる。蜘蛛の子を散らすように彼らは縦横無尽に大地を駆け巡る。赤と白のユニフォームに分かれた彼らは、今日だけでなく、ほぼ毎日その場でボールを蹴り、互いのゴールへと果敢に向かっているのだった。

川沿いにまっすぐ伸びるコンクリートの道を歩きつつ、彼らを何となしに眺める。

それが、塾帰りの私——須藤涼花の日課だった。

道を曲がり、まっすぐ続く道を歩く間だけの、ちよつとした観戦。しなやかに伸びる脚。こんがりとした肌を焼いた彼らは、夏の終わりを体現するかのように玉のような汗を肌から散らせては、ボールを追いかけていく。

彼らを見るたびに、私はさっきまで過ぎ去った塾を思い出す。しんと張り詰めた空気に時折響く怒号。こんなことも出来ないのかと塾講師に怒られ続けるのには高校二年間でとうに慣れたが、あの、人を貶し虐げる不快な声には未だ嫌悪感がある。

それに比べて、ここを通る時に聞こえる声はとても爽やかで心地よい。

プレイヤーにとっては、コーチに叱られ、時に怒鳴られることだってあるのだろう。理不尽なトレーニングでつらくなることだって、きつとある。私にだってそれくらいはわかる。

だからか、一つの目標に向かって集団で挑む鮮烈さを眺めることは、私にとって僅かばかりの救いだった。壁に張り巡らされた合格大学一覧と、咲き乱れる花。どこの誰とも知らない塾の生徒たちの笑顔が並ぶ廊下を通り過ぎ、狭い箱に詰め込まれて勉強をしていると、毎日が段々と麻痺していく。

学校が終わっても、息もつかずに電車に乗り、数年後の基盤を作るために勉強する。勉強は嫌いではないし、むしろ好きだ。新しいことを知るのは楽しい。

それでも、——すり減っていくのだ。

周りの友達が放課後に遊びに行く誘いをしてこなくなったのは、一年生のうちだった。学校で委員長をしてから、私の周りにはそれなりに人が集まるし、休み時間では雑談に花を咲かせることもある。

しかし、朝礼から最後の講義までが、私たちの関係だ。

親によって塾と習い事を可能な限り詰め込まれた私の休日は、実質日曜日の夕方だけ。日曜日のピアノレッスンの帰りは、もうくたくたになってしまつて遊ぶ気すら起こらないのが現状だった。

今日も今日とて、私は疲れた体をどうにか前に進めるために歩んでいる。

眩しい青春を目の当たりにすると、その疲れが希釈されるような気がしたのだ。

そろそろ新調する予定の、爪先部分が剥げかけたローファーでアスファルトを蹴る。ざりり、と削れた青春の残りかすが音を立てた。

「あ、」

ちらちらと彼らを見ながらまっすぐ歩み続けていると、川の方から流れてくる風が、わっ、と一気に私の髪を煽った。

思わず鞆を持たない手で髪を押さえるが、ちょっとだけ染めている茶髪が目の前ではらばらと散らされた。一瞬、視界を遮られる。世界が乱され、一瞬だけ、このまま消えちゃいたいなあと思った。でも、目を擦りながらも、私は歩く。

今日もこのあとは家で予習復習の嵐だ。歩みを止めている時間は、ない。しっかり勉強すれば適切に身につく体であることは救いだ。

時間さえ、自らの毎日さえ削りつついけば。

あとは、同じ学校に行こうとする人間に追いつかれないようにしていくだけなのだから。

二期期の中間試験から一週間が経ち、一ヶ月後には期末試験を控えてた時期。

その頃になると、さすがに私以外の人間の焦りも激しくなっていた。

進学校ではない私の通う高校は、もともと受験に対する意識が低く、高校二年の夏から秋にかけて、ようやく大学受験について意識しだす人間が多かった。

私は親の方針もあって、一年からほぼ毎日塾に通っているから、あまり彼らの気持ちが変わらないけれど。迫り来る現実、大学受験への準備。未来への心の整理をし、大学へ向かうならば勉強を進めなければならないことに気付き始めたクラスに、ようやく焦りがふつふつと湧き上がってくるのがこの時期だった。

まずは放課後に周りで交わされていた遊びの約束が段々と減る。それまで遊び呆けていたクラスメイトたちも授業を真面目に聞き始める。そしてそれまで遊びに誘われない私に対して、餅は餅屋とばかりに、勉強のコツを請う声が掛けられるほどだった。

「涼ちゃん、ほんと天才だよねー。可愛いし頭いいってズルくない？ 瑠々も見習いたいなあ」

私のノートを書しながら髪をポニーテールにしたクラスメイト、東郷瑠々が朗らかに笑った。

昼休みになり、生徒が各々のグループで食事をすませたころ。瑠々はいつものように自分の座席を百八十度回転させ、二人で一つの机を共有するような形にしつつ、普段のように私と雑談をしていた。

私の斜め前の席に座る瑠々はバレー部に所属しているが、いわゆる幽霊部員だ。この学校のバレー部自体、大会を目指すような部活ではないからか、瑠々は放課後は大抵近くのコンビニでバイトをしている。

「塾に通ってるだけだし、そんな褒めても何も出ないよ」

私は当然の事実を答える。仲が良い友達にはいえる、ざっくばらんな言葉だった。

今まで私は、常日頃ちいさな勉強時間を重ねてきた。本当は遊びたかったし、本当はサボリたかった。でも、この日々を習慣にしていかなければ、私は本当の天才には勝てはしない。

残念ながら、私は毎日授業を受けているだけで勉強が出来るような人間ではないのだ。

「涼花を褒めたらさ、明日の小テストの答えとか出たりしねーの？」

隣に座る男子、井筒佳祐が伸びをしながら私たちの様子を見つつ、問いかけてきた。

「ちょっと、佳ちゃん。さすがに涼ちゃんでもそれはないでしょー」

「二人ともちゃんと授業聞いている？ さすがに答えはわからないけど、テストに何出るかはわかるよ」

「マジかよ、涼花。……なんで？」

「いつも『ここテストに出すぞー』っていつてるじゃない。教科書あの場所に丸つけてるんだけど、小テストは全部そこから出してるよ。教科書にマークつけてるから写していいよ」